

脱 時 間 の 論 理

比較精神史的考察 —

両 角 克 夫

Time doth transfix the flourish set on youth,
And delves the parallels in beauty's brow,
Feeds on the rarities of Nature's truth,
And nothing stands but for his scythe to mow.

—Shakespeare's Sonnets (60)—

・不老不死、永遠の生命への願望は人間にとって素朴で根源的なものである。これは生物としての人間に潜在する個体維持・種族維持の二本能の意識面への反射である。この願望は昇華 (sublimation) と変貌 (metamorphosis) によって宗教となり、思想となり、又多様な文化現象を形成して来た。

不死も永遠も変化と流転からの脱出と超越を意味する。人間を老と死に追いやるものは何か、それは時間である。とすれば宗教も文化も何らかの意味でカオスと流転の克服、即ち脱時間への志向を内包するものである。この試論は、かゝる脱時間的志向の形態を東と西の精神史に即して比較考察し、その本来的な意味を解明せんとするものである。

(1)

時間とは時と時との間を意味する言葉であり、変化の認識を構成するための直観の基本的形式でもある。即ち時間は或る時点から他の時点への変転を意味し、その構造としては現在を基点とする前後関係——過去と未来から成立する。現在は過去の到着点であると同時に未来への出発点でもある。認識としては、アウグスチヌスも云っているように⁽¹⁾、過去は記憶、現在は直観、未来は期待として成り立つ。又時間に於ける推移の方向としては、未来から現在を通じて過去へとも、又過去から現在未来へとも考えられる。これは相対的であって、未来は未だ我々のところにやって来ない時であると同時に、我々がこれから歩いて行く目標の時でもある。いずれにせよ過去はすでになく、未来は未だなく、時の流れを不可逆であるとするれば、現在だけがあってしかも一回だけのものである。しかし、現象としての現在と過去や未来との関係はどうなるであろうか。

過去は決定されたものであり、未来は過去からの類推によって予想されるにすぎない浮動的なものであるが、予言的目的論の立場をとる場合、時間の終末はすでに予定されたものであって、現在を支配するものは未来である。しかし、因果性を強調する立場をとるならば、現在は過去によって決定される宿命論となる。いずれにせよ、現在の時点から周囲を眺

める時、万物は流転であり無常であることは歴史に於ける人類の実感であり原体験であって、それは又不安の根源でもあった。個人、民族、否人類全体がまさに現在こゝで未来に対するなんらかの意志決定を迫られている。意識的、無意識的を問わず、この不安克服への試みは科学、哲学、芸術、宗教等、すべて人類の精神活動の根柢にあって、各時代、各民族夫々の文化を形成して来た。

世界歴史に於ける文化の典型として、ギリシャとヘブライ、その総合としてのヨーロッパ、印度と中国、それから日本を含めての東洋を考えることが出来ようが、夫々の文化が独自であるのと等しく、そこに連関する時間の構造も個性的であって、従って脱時間の論理も異った様相を示すのである。これらの相異を比較することによって夫々の特殊性と同時にその奥に潜む人類共通の現代的課題に触れることが出来よう。

(2)

現象の流転の多様性と、それを包む無限の空間の永遠の沈黙は B. Pascal に恐怖感を与えたが⁽²⁾、これは古代人にとってはヌミノゼ (Numinose) として、神秘として体験され、様々な神話や宗教を生み出して来た。然し交通の発達と余暇に恵まれたギリシャの如き地方に於ては、現象を凝視し、変化の中に法則性 (ロゴス) を、多様の中に原型 (アイデア) を見出し、これを表現し限定せんとする営みが始った。これは科学と哲学の出発であった。労働と実生活の知識として出発した実証的自然科学は、やがて自覚の学としての人間の学に、更には存在と生成の学としての形而上学にまで進展する。これは労働から観想への進展であり、実在と現象との関連を扱う学として多様な姿をとるのであるが、その背後には流転に於ける恣意性克服への志向が潜在していたのである。

万物の流転を認めたヘラクレイトスも生成変化の法則として不変の道理を設定し、これを理性的認識対象と考へロゴスと命名した。又現象に於ける個物は個物を超越する普遍の本質として理性的直観によって把握される概念内容たるアイデアの影像にすぎず、従って時間は永遠の影であると考えたのがプラトンであり、そこではアイデアは現象にとって本質であり原因のみならず目的でもあった。プラトンの超越に対して内在の立場をとりながらも、アリストテレスは現象に於ける運動変化を質料に潜む形相の実現過程として捉え、最高のエイドスこそ万物の目的であると考え、プラトンと等しく目的論の立場をとった。アイデアと個物、エイドスと質料とを結ぶ力がエロースであった。

古代ギリシャに於ては、ディオニソンの祭に象徴される如く、時間は回帰的、循環的であり、目的のない盲目的繰返しであって、やがてニヒリズムに転落するものであった。それは、クロト、ラケツス、アトロポス三人の運命の女神にあやつられる人間の宿命観を生み、これを前提としてギリシャ悲劇が作られた。かゝる盲目的回帰的時間からの脱出は、芸術や文学を通じてのカタルシスによるか、形而上学的目的論としてのプラトンのアイデア論、アリストテレスのエイドス論などによって試みられた。即ちギリシャにあっては、脱時間は、脱パトス、脱現象、脱流転の方向に於て、文芸、自然哲学、形而上学を生み、夫々不安とニヒリズム克服を志向するものとなった。文化活動に於ける窮極的価値としての、真、善、美は、ギリシャに於てすでに、テオリア、プラクシス、ポイエシスの営みを通じて自覚され、理想

主義として後世に大きな影響を残すことになった。

ギリシャ彫刻の典型は、一見人体の写実を志向するが如くであるが、その彫刻家の眼は多様な人体の姿態の中に最も感動的で緊張した瞬間を捉え、その時点で時の流れを停止させ、不動の形象に凍結することによって永遠のものに化そうとした。これは古代エジプト其他の抽象的幾何学的芸術に於て更に著しく、すべて現象の多様と流転をその原型にまで還元し限定することによって時間から脱出し、生の不安を克服せんとするものであった⁽³⁾。

(3)

他方、旧約聖書の民として世界史に登場するヘブライ民族に於ける時間は出発と終末との中間を流れる一回限りのものであり、神話的にはエデンの喪失とメシアによるその回復の中間であり、それはまさに人間の歴史そのものであった。これは新約聖書に引継がれ、中間の時間の現象化としての歴史の変転は、キリストの再臨に象徴される終末との緊張関係に於て捉えられ、終末は相対的な歴史の止揚、即ちその完成であった。こゝに捉えられた時間は刻々と終末に向って前進し続ける運動であって、この過程としての出来事はすべて摂理的意味に於ける前進であり、計画性と目的とを内包するものであった。

前述の如くギリシャに於ける時間の構造は回帰循環の型にあてはまるものであったが、其後、プラトンやアリストテレスによって時間の目標がイデア或はエイドスとして設定され目的論の形をとることになる。これは時間の無意味な循環を脱せんとするものではあっても、未だ世界の出来事の中にその固有の意味が問われず、従って歴史的世界は成立しなかった。

歴史哲学はアウグスチヌスの「神の国」から出発する。彼の哲学はヘブライの摂理思想とギリシャ哲学乃至プロチノスとの結合であり、それは又ヨーロッパ精神の出発でもあった。彼の時間論はヘブライの神を前提とするものであり、無からの創造 (creatio ex nihilo) を説き、種子的理性 (rationes seminales) の内在とその展開にあたってはその結局的目標が与えられ、それに至る中間段階はすべて夫々の意味を有し、悪と呼ばれるものは善の欠除 (privatio boni) にすぎないとされた。これはまさに一元論的新プラトン主義と摂理信仰の結合の立場から時間を考えたものであり、予定・終末の色彩の強いものである。アウグスチヌスに於ては歴史の目標は神の国であった。更に中世後期に於けるトマスは、アウグスチヌスを受けつぎながらアリストテレス形而上学を援用することによって内在と展開の思想をキリスト教を前提として形成した。即ち、万物は段階的に展開し、一切の極致は神である。

ヨーロッパ近世に於ては、時間論はヘーゲルによって歴史を捉える弁証法として結実した。これは生成に内在する矛盾の論理を含むものであって、回帰的循環構造と摂理的目的論との結合によって、最終目標に向って進展する云わば螺旋形を描く時間である。思惟と存在の一致に基づく弁証法の論理は、存在の生成変化そのものであって、形而上学的存在論でもある。これはやがてマルクスの唯物弁証法に発展するが、ヘーゲルもマルクスもその時間構造としては自己矛盾を止揚しつつ発展する螺旋形であり、それは又歴史の論理として自由の王国を目標として前進する“進歩”の思想でもある。

こゝで18世紀イタリアの歴史哲学者、ヴィコが、文化の螺旋形の発展の中に摂理的意味を認めつゝも人間の主体性を説いたことを記憶すべきであろう。まさにヘーゲルの体系の中で

見落されがちであった個の主体性はキルケゴールによって実存として強調されなければならなかったが、ヘーゲル以前のヴィヨの中にその芽生を見ることが出来るのは興味あることであり、そこには最も現代的な問題、歴史に於ける個、個に於ける歴史、がすでに提示されている。キルケゴールにとっては自己疎外とは、永遠者とのかかわりを離れた状態であって、真の自己の回復は永遠者に向う努力を反復することであって、この努力の過程が“実存”することである。これはヘーゲル的な、普遍、客観、抽象的思弁、等に対する個体、主体、実践的思惟、の主張であり、現代に至る実存主義の系譜の中核を形成する思想である。その時間論としては疎外された時間として世俗的时间（Weltzeit）が考えられ、それから脱出し回復された時間が、根源的时间（Zeitlichkeit）であって、時間は二重構造となる。ヘーゲルの時間は螺旋的連続とも云えるが、実存的時間は、瞬間が永遠との緊張関係にあって断絶的に飛躍していく非連続の構造をもつ。世俗的时间の連続性から根源的时间への脱出が現象学的時間の様態であり、根源的時間は体験流そのものの原形式でもある。キルケゴールなどのキリスト教的実存主義の立場では、罪の時間としての通俗的時間から永遠に向っての脱出によって、根源的時間の自己回復が可能となる。しかしこゝには、時間に於ける量と質、連続と非連続をどのように総合するかの問題があり、これは前述のヴィヨが18世紀にすでに提示した問題であった。

ヘーゲルの合理的目的論的螺旋形の連続的時間に対しては、キルケゴール以外の方向としてショーペンハウエルからニーチエへ、ニーチエからシュペングレル等に至る盲目的循環構造の時間が説かれた。これはギリシャのディオニソスの時間の復活とも云うべきであろう。

まず、この世界を生への盲目的意志の表象として捉えたショーペンハウエルの場合、この非合理的な運動からの脱出は、空間、時間、因果の三形式を超える天才的直観にもとづいて盲目的意志を否定することによって可能となる。ニーチエはショーペンハウエルのあとを受けて、時間を無意味な回帰性として捉え、このニヒリズムの克服をショーペンハウエルとは逆に無目的な運命の肯定（amor fati）を決意することによって実践しようとする。ニーチエの影響の下に、文化の発生、生成、死、を回帰的重層的に捉え、西洋の没落を宿命として考察したのがシュペングレルであり、これを受けながらも、文化の重層を人類の自由意志による目的設定によって結びつけていこうとするのがトインビーであろう。この場合、時間構造としての回帰性は、人類の自由意志による脱出の可能なものとして示唆される。

以上、ギリシャとヘブライの時間構造を比較し、又ヨーロッパに於けるこれら二つの時間構造の結合を考察してきたが、こゝで興味のある点は、これらはすべて円環をなすことである。

ギリシャに於けるディオニソスの時間構造は周期的循環（periodos）であったが、其後あらわれたプラトンのイデア論的時間構造は一見、目的論的に捉えられた直線構造と考えられる。アリストテレスの場合もこれに等しい。然しより深く考えるならプラトンの時間も回帰的である。彼が「ファイドロス」で述べる如く、靈魂はイデアの世界から現世に転落して来た時、イデアを忘却したが、エロースによってイデアの想起を促される。更に新プラトン派に至っては、プロチノスに於ける如く靈魂のヌースへの回帰、更には神への没入とエクスタシスを説くことによって、人生の究極目的たる解脱を物語っている。これは、一者（to hen）としての神から出て、神に帰る一大円環を説くものである。

ヘブライの時間も人類史を救済史として考える立場から一回だけの回帰として、神から神への道が説かれる。旧約及び新約に於ては、時間は神の創造行為に出發し終末にあたってすべては完成し神の永遠に帰する。個体としては、生とともに来り、死とともに去っていく。永遠から来り、永遠のもとに去る一回だけのものである。

ヘブライ的救済史の時間は、エデンの喪失からその恢復までであり、メシアの出現によってそれが可能となるのだが、新約では、メシアとしてのイエズスが受肉してこの歴史的時間の中に入って来た。こゝに、旧約と異り新約では決定的なものがすでに現れ、更にキリストの再臨を待つ信仰が生れた。従ってキリスト者は、「今すでに」と「いまだ」との間の緊張した中間の時間を生きている。新約の場合イエズスの十字架による過去の罪の贖いの希望とともに、時間的には罪と死の過去からの脱出が保証されることになった。キリストの再臨によって歴史は終末し、最後の審判が行われ永遠の支配が確立する。永遠から永遠への一回だけの回帰、これがヘブライ、キリスト教的時間構造である。

無神論的立場にあるマルクスも、原始共産制から自由の王国としての未来的共産制に至る過程を歴史的必然として捉え、これを史的唯物論、唯物弁証法の論理によって解明せんとした。これは終末に自由を設定し、人間の類の本質の解放を目標とするものであり、その意味で神なきヘブライ思想と呼ぶことが出来よう。その時間構造は図式としてはヘーゲルと等しく螺旋形をなすものであって、歴史的必然にそった前方への脱出の実践が歴史の運行を促進し、進歩を約束する。こゝでは、ヘブライのメシアは労働者階級なのである。

次に東洋に於ける時間構造はどのようなものであろうか。

(4)

輪廻説は因果性を強調する業説と結びついてウパニシャッドの時代から印度で行われて来た。これは植物の成熟、結実、没落、再生の周期に基づいて考えられたディオニソスの時間に似ている。仏教に於ける四苦、即ち生、老、病、死は、個体ごとに繰返されていく変転であって、かゝる盲目的循環の時間から如何にして脱するかが仏教の救済の論理であり、そこからの解脱が涅槃の境地に他ならない。

或る行為は次の行為の原因となり、次々と因果の鎖で結ばれていく。これを時間の面で捉えるならば現在は過去によって、未来は現在によって規定される。とすれば過去からの脱出はどのようにして可能となるか。仏教の救済の論理を手がかりとして考えるならば、現象はすべて多元的、流転であり、相対的因縁によって生起し、消滅していく。その法そのものも無自性であり、空である⁽⁴⁾。これは実体概念の否定であり、無常そのものが法であり、法は無我であり空である。然し人間は煩惱によって“我”に因われ無明の中にさまよっている。本来相対的で相互依存的な事物を絶対化し、実体化することによって人は閉ざされた時間の中に落込んでいく。だから、人は般若を通じて我も法も空であることを悟ることによって時間の中に在って時間の束縛から脱することが出来る。時間からの超越は、時間に内在しその相対性を受入れる柔軟心によるものであって、衆生が悉く仏性を有するのは内在に於ける超越の可能性、即ち般若の遍在を説くものであろう。諦めは悟りによる解脱であって放棄ではない。

又、他力本願を説く浄土教の立場では、この穢土としての宿命的時間の中にあつて、極楽である彼岸に行くには、阿弥陀の如き無量寿即永遠者に絶対帰依する以外にない。阿弥陀は浄土の主であり、時・空を超えたものである。阿弥陀によってすべては相対化される。然し仏教である限り、阿弥陀は、ヘブライの神ではなく、実体でもない。強いて云えば、それは“空”であり、無自性の自覚である“空”はあらゆるものを相対化し包みながら、自覚的に限定されるだけである。“空”は対象化され得ない。脱時間の場として開かれる“空”は勿論図式化されないものであつて、循環でもなく目的や終末からも自由である。然し決して虚無ではない。

次に日本文化に於ける時間を考えて見たい。

(5)

時間の構造を考える場合、精神史や文化との関連に於て捉えるのが便利である。ギリシヤに於ては、神話・悲劇・自然哲学、形而上学などの関連で、ユダヤ、キリスト教の場合はその啓示宗教、インドではその神話と宗教哲学、中世以来のヨーロッパではギリシヤとヘブライとの結合の努力に於て夫々の時間の構造とそれからの脱出の形態が看取された。

日本的時間の特質は感性的である。我々は季節の変化によって時間の推移を感じるのであり、日本文学では特にこの季節感が強調される。日常、手紙の冒頭で繰返される季節の挨拶は、相手の無事を問ひ、共通の季節感にひたることでお互の時間的共感をたのしむのである。

季節の感覚は変化の感覚であつて、四季の転移は単なる循環ではなく、不断に新鮮な時間感覚として日本人の中に生きて来た。その点、日常性と文芸の間に差別はない。これに仏教的無常観と老荘の自然観とが加つて独自の時間感覚が成立する。

時間の構造としては、四季をサイクルとして毎年積重つていく螺旋形となるのであるが、その方向としては目的も終末もない。勿論ギリシヤ的宿命観もない。ぼんやりした時間の流れの中に現在が浮んでいて、生々流転こそ現在の意識そのものである。老荘からの無、仏教からの空、この二つは形而上学的次元で日本的時間の重要な構成要素となり、無用之用としての余白や余韻、実に対する虚、陽に対する陰の意味づけとなる。又人間の有限性に対する自然の悠久性の強調は、日本の諦念を通じて自然的時間への帰依と無為自然、自然法爾⁽⁵⁾を通じて“我”と現世的時間からの脱出を志向するものである。これは、人工的時間を脱して悠久な自然に帰る時に得られる憩いと“ものゝあわれ”の美的感覚ともなった。

日本の文人達は旅を愛し、漂泊の生活を⁽⁶⁾送った人達が多い。これは彼等が、旅によって世俗の時間からの脱出の機会を体験し、過去を相対化しこれを超えることで造化としての自然に回帰しそこに自由を見出すことが出来たからである。

日本の文人達の多くは、時間の流転に身を任せながら、流れ去り消滅していくものゝ姿に美を見出していた。あらゆる流転を包む大自然そのものが永遠の流転であり、そのリズムはゆっくりとすべてを吸収するものである。このせまこましい世俗の時間から脱して悠久な大自然の中で人は真の自己を恢復しこれを眺めることが出来る。こゝから文芸の創作も出發する。

又、菩薩道としての仏教は日本人に向上と向下、往相と還相を教えて来た。これは世俗の時間を脱しながらも再び世俗の時間に帰って来ることであり、それは慈悲心となる。これは神秘主義とも異り、実用主義とも異なる。日本人の現実主義は、現在を中心と考え、過去は水に流し、未来に目的や終末を設定しないことである。本来楽天的で現実主義である日本人は、老荘や仏教に影響されながらも、形而上学や哲学に興味を示さず、すべてそれらを感性的に受取り自己に同化して来た。時間構造としても“世俗”から“自然”へ脱出し又“世俗”に帰って来る円環を形作るものである。

以上は日本の時間構造の側面にすぎないが、風土や生産を基礎とする民族学的立場からの時間論が可能なのは勿論である。

(6)

現代が人類史の中で一大転換に臨んでいることはたしかである。特に機械文明の発達によって強化されていく人工的時間の速度は刻々と促進され、人間の内部時間とは、益々離れていく。人間の内部時間は生理的・心理的であり、これは自然的時間である。現代人の意識は人工的時間と生理的・心理的・自然的時間の相接する面であり、それは歴史的時間を作っていく場所でもある。

人間の生態系 (ecosystem) も二重であり、自然的生態系と社会生態系がそれである。人間の生存はこれら二つの生態系の速度とリズム夫々の調和に依存している。現代の危機の一つは人間が自分で作って来た人工的社会的環境に順応出来なくなって来つゝあることである。人工的時間からの脱出こそ現代の課題であるが、それには単なる主観的観念的転換のみでなく生産と消費の速度を自然のリズムに調和させることである。二つには心理と肉体との統一、心身一如の実践的人間観、身体論が確立されなくてはならない。

今までの人間の歴史に於ては個体の死、民族の死が問題とされたが、今やまさにホモ・サピエンスの死が問題とされるのであり、ホモ・サピエンスはそのサピエンティアによって自らを未来に導くことが出来るかどうかの危機に直面している。サピエンティアは知って行動する力であって、大自然を謙虚に知ることによってこれに正しく順応していく智慧なのである。

又、現代に於ける時間は極めて多元的な価値を包みつゝ流転する。我々は人工的時間からの脱出と同時に孤立的時間からの脱出を志向する必要がある。こゝでは東洋的な自然的時間の回復と同時に、相互主体性、間主体性の回復が要請され、唯我的閉鎖的時間からの脱出が意図されなくてはならない。盲目的な生産力と進歩の信仰から調和への脱出は、人工的歴史的時間を大自然の運行の方向に開くことである。こゝでの大自然の時間は単に量的物理的時間ではなく、生命の飛躍を可能とする開かれた時間⁽⁷⁾である。

古今東西の思想史を通じて共通な点は、現実の貧困はすべて本来的なものからの疎外に起因すると考え、イデア、神、自然、道、無、空、の如きものに回帰することによって自由即ち相互主体の回復を図らんとすることである。従って、経験的因果的時間からの脱出も、エゴからの脱出であり、煩惱と執着、固定的体制等々から相互主体的自由と調和と開かれた時間への脱出を意味するものに他ならぬ。

注

- (1) Les confessions de Saint Auaustin, Livres VIII—XIII (Desclée de Brouwer, 1962) p. 312.
- (2) Pascal : Pensées (Brunschvicg 206)
- (3) Worringer : Abstraktion und Einfühlung, 1921. T. E. Hulme ; Speculations, 1924.
- (4) Nagarjuna : A. Translation of his Mulamadhyamakakarika by K. Inada, (Hokuseido, Tokyo, 1970.)
- (5) 親鸞 : 末燈鈔五, 正喜二年十二月十四日.
- (6) 芭蕉 : 奥の細道
- (7) Bergson : Les deux sources de la morale et de la religion, chapitre IV. 1932.

Summary

Freedom from Time
—From the Point of View of Comparative Moral History—

by KATSUO MOROZUMI

All things pass away and death waits for us. How can we escape from death and change initiated by Time? Time and Death, how can we be free from them? This has been one of the most serious problems since ancient times both in the East and in the West. In the fields of religion, metaphysics and fine arts human beings have tried to transcend Time, longing for eternity which promised their salvation. This essay treats of some types of human salvation comparing Greek, Semitic, Buddhistic and Japanese ideas of Time with one another.